

アラビア半島の遊牧化

—サウジアラビア北西部、ワディ・グバイ遺跡群の第8次最終調査(2022)—

藤井 純夫 金沢大学古代文明・文化資源学研究所特任教授
 上杉 彰紀 金沢大学古代文明・文化資源学研究所特任准教授
 久米 正吾 金沢大学古代文明・文化資源学研究所特任助教
 安倍 雅史 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター主任研究員

Pastoral Nomadization in the Arabian Peninsula: The 8th Final Field Season at the Wadi Ghubayy Sites, Northern Hijaz, 2022

FUJII, Sumio Specially Appointed Professor, Center for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
 UESUGI, Akinori Project Associate Professor, Center for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
 KUME, Shogo Project Assistant Professor, Center for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
 ABE, Masashi Chief Researcher, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

藤井
純夫／
上杉
彰紀
ほか

1. はじめに

2017年3月に始まったタブーク州北部、ワディ・グバイ中・上流域における先史遊牧民遺跡の総合調査

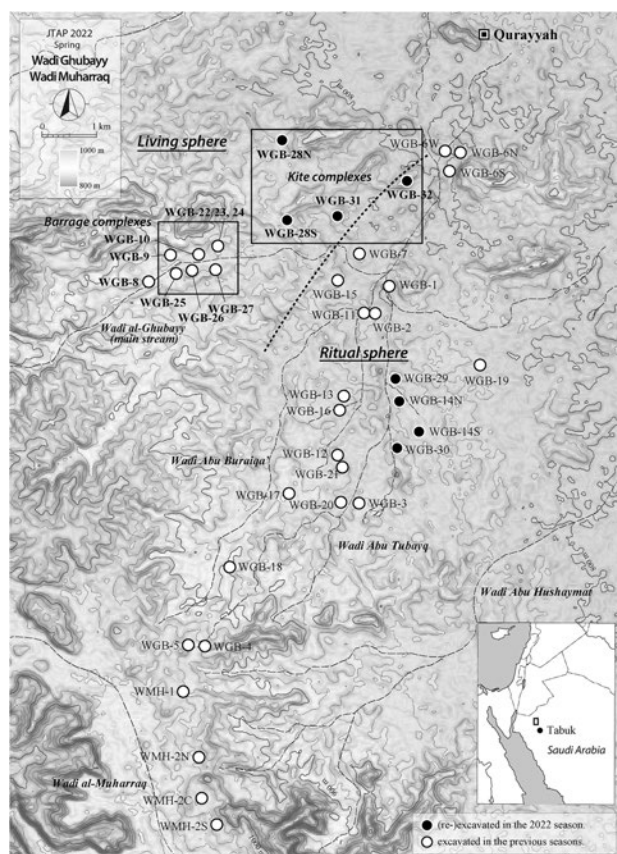


図1 ワディ・グバイ遺跡群：第8次調査の対象遺跡(●)とそれ以前の調査遺跡(○)

は、前年のダム調査(藤井他 2022)と本年2回の調査を以って完了した。本年実施の第8次調査(5月10日～7月2日)では、銅石器時代に年代付けられる集団追い込み猟施設(カイト・サイト Kite site)とこれに隣接するキャンプ址群を発掘した(図1)。併せて、調査区の南半に展開する葬祭遺跡群の補足調査を実施した。続く第9次の調査(11月16日～12月17日)では、ワディ・グバイ流域の北東約50 kmに位置するサフワーン遺跡群(Safwan sites)に移動し、ワディ・グバイ編年の不足を補うための短期的な発掘調査を行った。紙数制限のため、本稿では前者を中心に報告し、後者については概略のみを述べる。

2. カイト・サイト群

カイトとは、扇状に広がる一対(またはそれ以上)の長い誘導壁とその収束地点に設けた小型の囲い場から成る、追い込み猟施設のことを言う。上空から見た時の形が洋風(kite)に似ていることから、この名がある。

調査区北端に位置する3件の遺跡で、計4基のカイトを登録・発掘した。その中で最大の規模を誇るのが、28S号遺跡(WGB-28S)のほぼ中央に位置する1号カイト(Feature 2025)である。その構造は3部に分かれており、第一は台地上に配置された3本の長い誘導壁(全長90～135 m)、第二はその東斜面に(前者とはやや不連続に)続く3本の短い誘導壁(全長23～58 m)、第三は最終収束点に設けられた楕円形の囲い場(16×9.5 m)である(図2)。いずれも未加工の砂岩を積んだ

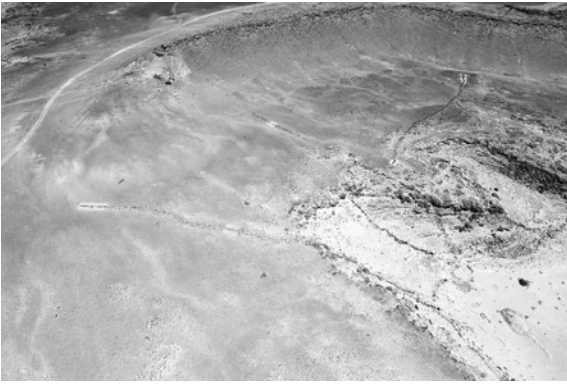


図2 ワディ・グバイ 28S 号遺跡：1号カイト全景(南東から)



図4 ワディ・グバイ 28S 号遺跡：2号カイト全景(南から)



図3 ワディ・グバイ 28S 号遺跡：1号カイトの囲い場(北東から)



図5 ワディ・グバイ 28N 号遺跡：3号カイト全景(北東から)

だけの簡素な構築物で、追い込んだ獲物を懸崖に落とし込む方式の狩猟施設と考えられる。囲い場の直前にも2m以上の段差があり、加速した獲物を囲い場の厚い東壁に衝突死させたのであろう(図3)。そのため、囲い場のみならず、後述する周辺キャンプサイトや石器製作址でも、鏃や槍先などの典型的な狩猟具は確認できなかった。なお、誘導壁1の北端部分には、勢子が隠れ潜むための小型の円形遺構が組み込まれていた。この遺構からは、解体具と思われる大型のチョッパー1点が出土した。

28S号遺跡の南西隅でも、やや小規模な2号カイト(Feature 2032)が確認された。本例は2本の誘導壁から成るシンプルなカイトで、囲い場はやはり懸崖下に設けられていた(図4)。なお、このカイトと1号カイトとの間には直径1~2mの小型集石列が配置されており、2件のカイトがそれぞれ別の集団によって運営されていたことを示唆している。遺物は無かった。

一方、28N号遺跡の西端で確認された小型カイト(Feature 2052)は、立地・規模・構造ともに、28S号遺跡の2号カイトに類似していた(図5)。ここでも、隣接カイト(この場合、28S号遺跡2号カイト)との間

に集石列が走っていた。遺物は無かった。

なお、32号遺跡の小型カイト(Feature 2082)は保存が悪く、囲い場と誘導壁の一部だけが確認された。このカイトは他の3件とは異なり砂地の緩斜面に囲い場を配置していた。やはり遺物は無かった。

3. カイト関連のキャンプ・サイト群、石器製作址群

28S号遺跡1号カイトの北東約500mに位置する砂岩台地の縁辺で、2件の岩陰住居群(Complexes 2013, 2014)を確認した(図6)。カイトを運営していた集団の短期キャンプ址と考えられる。双方共に、岩陰の前方に風除け・日除け用の低い石積み壁を設けただけの簡素な住居群であった。銅石器時代と思われる土器が少数出土したが、これは隣接するカイトの年代を示唆している。

類似のキャンプサイトは、ワディを挟んで28S号遺跡の東約500mに位置する独立丘(31号遺跡)の上部平坦面でも確認された。この遺跡には、岩陰住居群に加えて、連結円形遺構群や銅石器時代に特有の大型横長住居(broadhouse)などが含まれていた(図7)。な



図6 ワディ・グバイ 28S 号遺跡：2013 号岩陰住居群、ユニット I(南西から)



図9 ワディ・グバイ 14S 号遺跡：1073 号擬集落(南から)



図7 ワディ・グバイ 31 号遺跡：各種キャンプ址(北西から)

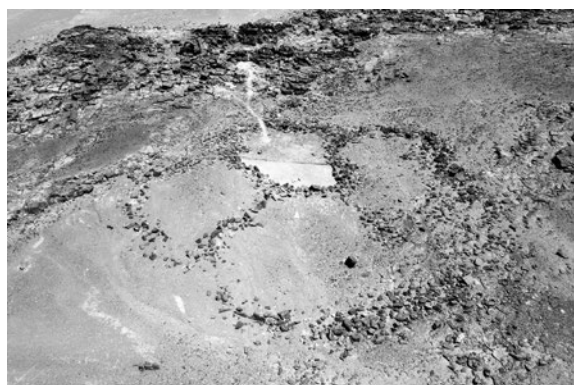


図8 ワディ・グバイ 28N 号遺跡：2053 号キャンプ址(南から)

お、31 号遺跡下のワディ段丘面から 1 号カイト北端の台地にかけて、計 4 件の小規模な石器製作址が発見された。ただし、表採した石器は石核や石刃が中心で、狩猟具は含まれていなかった。

28N 号遺跡の小型カイトにも、これに関連すると思われる連結円形遺構群が伴っていたが、遺物は含まれていなかった(図 8)。一方、32 号遺跡の小型カイトには、明確なキャンプ跡は伴っていなかった。

4. 葬祭域の遺跡

調査区南半の葬祭域では、以下 4 件の遺跡を補足調査した。まず北端の 29 号遺跡(WGB-29)では、遺跡南西部に位置する連結円形遺構群(Feature 1070)を発掘し、銅石器時代後半に相当する放射性炭素年代を得た。その南約 300 m の丘陵端部に位置する 14N 号遺跡(WGB-14N)では、先年の調査遺構(藤井他 2019、2020; Fujii *et al.* in print)に隣接する U 字型遺構(Feature 8068)を発掘した。さらに南方の 14S 号遺跡(WGB-14S)と 30 号遺跡(WGB-30)では、2 ユニット連結型の小型擬集落(Feature 1073、1074)を清掃発掘した(図 9)。

5. サフワーン遺跡群

3 件の遺跡を調査した。遺跡群の南西端に位置するハマダ・シャロウラ(Hamada Shrawra)では、ニッチ付きの(ただしニッチ内立石を伴わない)エンクロージャー 4 件(Features 102、103、105、106)とパンサー・トラップ 1 件(Feature 101)を、それぞれ清掃または発掘した。

一方、遺跡群の北東端に位置するサフワーン 1 号遺跡(Safwan 1)では、2 ユニット連結の小型擬集落 1 件(Feature 130)、ニッチ付きの(ただしニッチ内立石を伴わない)エンクロージャー 3 件(Features 101、106、129)、矩形の墓室を持つ石積塚 1 件(Feature 117)を、それぞれ発掘した(図 10)。その南に隣接するサフワーン 2 号遺跡(Safwan 2)では、時間的な制約により、遺構(全 46 件)の分布調査だけを行った。なお、調査の最終週には、先土器新石器文化 B 前期に比定されるマスイウーン遺跡(Masyoon)を試掘し、ヘルワン型尖頭器を出土する円形堅穴遺構 2 件を確認したが、

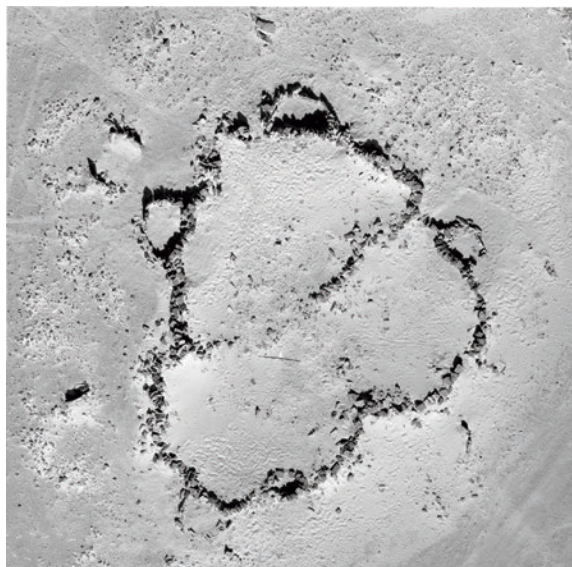


図10 サフワーン1号遺跡：106号連続型エンクロージャー(上空から)

これについては次年度に実施予定の本調査と併せて報告する。

6. 考察

問題は、4件のカイトの年代である。一般に、レヴァント地方内陸部のカイトは後期新石器時代に、ネゲブ地方やシナイ半島のそれは銅石器時代から前期青銅器時代に、それぞれ位置付けられている。ワディ・グバイ流域のカイト群は、地理的な近接から見て、後者の一類型と考えられる。総じて規模が小さく、捕獲に斜面の落差を利用していること、囲い場が単純な円形・楕円形であることも、両者に共通している(Holzer *et al.* 2010; Kennedy *et al.* 2015)。隣接キャンプのC-14年代や土器の型式なども、この推定に合致する。加えて、前期青銅器時代に位置付けられる円塔墓との切り合い関係や建材転用関係も認められる。例えば28S号遺跡の1号カイトでは、誘導壁1の東端部分が小型の円塔墓(Feature 2024)に切られていた。同2号カイトの場合は、誘導壁2の東端部分の建材が隣接の円塔墓(Feature 2033)やプラットフォーム(Feature

2034)に転用されていた。

4件のカイトが銅石器時代だとすると、葬祭遺跡群の中のニッチ付きエンクロージャーとほぼ同時代ということになる。集団狩猟の施設であるカイトサイトが、集団儀礼の施設としてのエンクロージャーに対応していることは、往時の社会構造を知る上で興味深い。

7. まとめ

過去8回に及ぶワディ・グバイ流域の総合調査によって、1)調査区南半の丘陵地帯は後期新石器時代から前期青銅器時代の葬祭域として用いられたこと、2)調査区北西端のワディ本流域には前期青銅器時代末の貯留式灌漑ダムが密集しており、生活域として利用されたこと、3)調査区北東端の独立丘陵群は銅石器時代カイトによる集団追い込み猟の場であったこと、が判明した。しかし、この三つの異質な要素を社会構造的に、かつ時系列に沿って、統合した全体像はまだ描けていない。今後、様々な比較研究を通して、この点を検討していきたい。

参考文献

- ・藤井純夫・上杉彰紀・久米正吾 2022「アラビア半島の遊牧化、ワディ・グバイ遺跡群の第6～7次調査(2021)」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』60-64頁 日本西アジア考古学会。
- ・藤井純夫・足立拓朗・上杉彰紀・小高敬寛 2020「アラビア半島の遊牧化—ワディ・ムハラック、ワディ・グバイ遺跡群の第5次発掘調査(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』132-136頁 日本西アジア考古学会。
- ・藤井純夫・足立拓朗 2019「アラビア半島の遊牧化—ワディ・グバイ遺跡群の第3～4次発掘調査(2018年)—」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』66-70頁 日本西アジア考古学会。
- ・Fujii, S., A.A. al-Mansoor, T. Adachi, A.I. Al-Munif, K. Nagaya, S.M. Al-Tamimi, R. Tokunaga, A. Uesugi and T. Odaka (in print a) Archaeological investigations at the Wadi al-Ghubayy Sites (NW Arabia): A preliminary report of the 2017-2019 excavation seasons. *Atlat: Journal of Saudi Arabian Archaeology* 27.
- ・Holzer, A., U. Avner, N. Porat and K.L. Horwitz 2010 Desert kites in the Negev desert and northeast Sinai: Their function, chronology and ecology. *Journal of Arid Environments* 74/7: 806-817.
- ・Kennedy, D., R. Banks and M. Dalton 2015 Kites in Saudi Arabia. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 26: 177-195.